

出来事の「劇的」効果について

高野 洋 志

岡山理科大学教養部

(1989年9月30日 受理)

はじめに

日常生活のなかで直接体験し、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌といったマス・メディアを媒介としたり、周囲の人々の口をとおして、間接的に「知る」ことができる出来事のうち、比較的短時間に生起するものを、ごく大まかに区分すると、日々の天候の変化や、悪天候、地震その他によって生ずる自然災害、人の誕生、結婚、病気や死といった個人の生涯に関するもの、事故や一般犯罪に関するもの、政治、経済や社会、さらにスポーツ、芸術、科学技術、文化一般の領域のものに加えて、家庭内、職場、路上や買物中に起る、無数の、分類も困難なものがある。

これらの出来事は、情報として求められ消費される場合には、消費者によって価値を付与され、選択される。特定の領域の情報を求める人々のために専門誌がある一方、普通新聞は、各地で、様々な領域で生じた出来事の情報「セット」を提供する。直接体験したり、間接的に知った出来事を語り合うのは、情報を得るより、相互の関係を維持し、深める目的で行われる場合もある。それは、ある出来事に際して受けた印象を他者と共有することから、連帯感が深まり、不安が解消されるからである。またある出来事は、直接体験した人々によって忘れられたり隠されたりして、その内容が第三者に知らされない。従って、毎日の出来事が、大量の情報となってわれわれのもとに届く一方で、無数の出来事が、遠くで、あるいはすぐ近くで起っていながら忘れ去られ、隠されてしまう。

こうした出来事のうち、情報となって多くの人々に伝えられ、それを受けとる側に、直接の体験者でないにもかかわらず、とくに強い感情を呼び起すものについては、「劇的」という形容詞が用いられ、そのなかでも、当事者が不幸な境遇におちいる場合には、同情する人々の側から「悲劇的」という形容詞が用いられる。本稿では、特定の出来事が「劇的」と形容される理由と、それらの出来事がどのような社会的役割をはたしているかを検討する。

1. 「劇的」出来事とは何か。

「劇」、**「劇的」**という語は、“drama”（drama 仏、Drama 独）、“dramatic”

(dramatique 仏, dramatisch 独)の訳語である。劇場を離れて、“drama”が用いられるのは、悲惨な、または恐しい、ひとつまたは一連の出来事を指す場合、事故や犯罪、まれには、深い愛情や恋愛に関係する出来事を指す場合である。“dramatic”は“tragic”の意味で用いられることがある以外に、「危険な」、「困難な」、「重大な」等の意味がある。

河竹登志夫によれば「『劇』という字は『虎』と『豕』と、刃物を示す『刂』の合成で、二匹の猛獣ないし猛獣のごとくただけしい対立者が、牙をむいて激しくたたかうありさまを意味する。すなわち人間と他の何物か一運命、神、境遇、社会悪、他の人間、自分自身のうちひそむ相反する性情など一との矛盾・対立が次第に表面にあらわれ、ぶつかり合いながら次々に行為を生み、一つの結末にいたる過程が、いわゆる劇的行為である。『イデオグラムの解釈』はともかくとして、この戯曲論には舞台の外で生ずる「劇的」出来事と共通する何かがある。舞台の上の芝居は、上記の「劇的行為」を含まぬ限り、観客は集まらず、現実に生起する出来事はこのような要素を持つことで多くの人々の関心を引き、マス・メディアに乗る。

もともと人は、常に社会的役割を意識的にか無意識にか演じている。家庭内での、「夫」・「妻」・「子供」の役割、職場での「平社員」・「管理職」の役割や市場での「売手」・「買手」の役割等、一日のうち数役を演じ分けねばならないこともある。この「演技」の舞台の公的性格が強まれば強まるほど、それは慣習、道徳や法等のいわゆる「社会的事実」に規定され、違反すればすぐに何らかの制裁が程度は様々であるにせよ加えられるであろう。逆に、舞台の私的性格が強まれば、「演技」は次第に意識されなくなる。

社会的機能としての「演技」は日常生活の秩序を維持するために不可欠であり、繰り返しがその安定性を保証する。しかしこの秩序は決して堅固ではない。課せられ期待される役割は、自分の望む役割と常にずれている。一度身についた役割を捨てることも、周囲に自分の新しい役割を承認させることも常に多少の摩擦を生じさせる。病気・事故による死や離婚等は社会全体では統計で表わされる日常的出来事ではあっても、家庭のような構成員の少い小さな社会単位には致命的打撃を与え、役割は大きく変化せざるを得ない。ある出来事が多くの人々の注意を引きつけ、強い印象を与えることで「劇的」と形容されるとすれば、個人あるいは構成員の少い小さな社会単位が直接体験する可能性のある、あるいは実際に経験したことのある日常生活の秩序の崩壊がその出来事にみられ、共感を呼ぶからである。

アリストテレスは「詩学」のなかで、悲劇の素因として次のものをあげている：a. 物語（ミュートス）、b. 性格（エートス）、c. 措辞・語法（レクシス）、d. 知性（ディアノイア）、e. 視覚的効果（オプシス）、f. 音曲（メロポイイアー）。このうち、現実に生起する「劇的」出来事と関係が深いと思われるのは、彼が「悲劇の第一原理であり、いわば悲劇の魂にあたるものである」²⁾としている「物語」で、その全体が「始め」・「真中」・

「終り」の秩序と統一性を持ち、適当な長さがあること（「全体がらくに記憶のうちにおさまるほどのもの」）の他に、「逆転」（ペリペテイア）、「認知」（アナグノーリシス）及び「苦難」（パトス）が不可欠な要素とされている。「逆転」とは、予期されていたことが正反対に覆される事態を指し、「認知」とは、「逆転」を契機に、運命的事実を認識するに至ること、また「苦難」は、「その人物が身をほろぼしたり苦しんだりするような行為のことである」³⁾とされている。

演劇は、舞台と観客席とのあいだのコミュニケーションを前提としている以上、演技と観客の心とのあいだで同調関係が必要である。A. シュッツは、どのようなコミュニケーションも必要とする相互的な同調関係について「この関係は、人々が内的時間における他者の経験の流れを互いに分かちもち、生き生きとした現在を共に生き、この共同性を『われわれ』として経験することによってうち立てられる」⁴⁾と述べている。アリストテレスが、物語に、秩序・統一性と適当な長さが必要であるとするのは、これらがシュッツのいう同調関係を成立させる物理的また生理的条件を成すからに他ならない。しかし現実には生起する出来事では、行為者あるいは直接体験者が、その出来事を情報として知らされる者との間にコミュニケーションを成立させようとしているかどうかは場合による。さらに、知らされる出来事は、舞台上の劇とことなり、不定形で断片的である場合が多い。殺人事件を例にとるなら、報道は、ある人間が殺害され捜査が開始されたという内容から始まる。犯人が明らかになり、動機と行為の全容が再現されるのは、法廷で刑が確定するときであり、犯人が逮捕されなければ、この事件は、被害者に近い人々の悲しみと憤りが出来事として伝えられるにとどまり、やがて忘れられる。断片的な情報しか伝えられなかったり、不定形であったりする出来事がそれにもかかわらず知らされる者に強い印象を与えるとするれば、それが、日常生活の秩序を大きくはずれる異常さを持つからである。「よその連中はお互に頭をぶち割り合うも結構、てんやわんやの大混乱も結構でさあ。ただわが家だけは願わくば事なかれかしですなあ」⁵⁾と語る、「ファウスト」中の一市民のように、多くの人々は、自分と自分の所属する小さな社会単位の平穏な状態を写す鏡として、異常で恐い出来事をとらえるのである。

出来事の中には、行為者と公衆とのあいだに同調関係が出来てコミュニケーションが成立する場合もある。劇場とことなり、舞台と観客席のあいだの仕切りは存在しないゆえに、特定の状況下では、当初公衆にすぎなかった者を行為者の列に加えて事態がその規模を拡大する。この種の出来事は、本質的に演劇性の強い、政治や宗教の領域に多くみられ、きわめて劇的展開をみせる。「政治の宇宙はいかなるものであれ、すべて一つの舞台であり、より一般化していえば、さまざまな効果が創出される演劇空間である点で変りはない」⁶⁾とG. バランディエはいう。多くの国家が、年に一回、独立記念日、革命記念日等のかたちで壮大な祝典を準備し、舞台を設定して国民的統合とゆるぎなき政治権力のイメージを演出する。「権力はむき出しの支配によっても、合理的な正当化によっても、保持されうるも

のではない。転位、象徴の操作、象徴の儀式的枠内での組織化のみが権力を作り保持するのである。』⁷⁾しかしこのことはまた、規模こそことなっている、反権力の側にもみい出せる技術である。政治の舞台上では、反政府側は政府の設定した舞台装置と「役者」達をパロディー化すると同時に、悪政の被害者達の苦しみを強調し、破滅にむかう世界で彼らのみが明るい未来への導き手であることを演出する。政府のとった政策が成果をあげなければ、反政府側との対立は深まる。政権の継続・交替が公平な選挙によって保証されていない限り、やがて妥協の不可能な状況がやってくる。それまでの型にはまった演出や演技がもはや通用しなくなり、権力の望む秩序が保てなくなる。政府は、その政策の失敗の原因が、外部の敵と結びついた内部の敵の行為にあり、国民に対し、政府を信頼して協力するか、混乱を選ぶかの二者択一をせまると同時に、秩序を破壊し、国家を危機におとし入れようとする者に対する暴力の行使を正当化する。こうして「むき出しの支配」、弾圧、迫害や流血の事態を待つだけの、「劇的」出来事の筋書きと舞台装置が出来上る。対立する双方は政治的理由で行使された、あるいは被った、暴力を重大さの記号として、それぞれ自分の側に国民の支持を集めるための最も効果的のメッセージを送る。ただしこの状況下では双方が自分の側に都合の悪い出来事についての情報を極力隠し、都合の良いそれは誇張しようとするために、「劇的」と形容されるような政治上の出来事は多くのゆがめられたり隠蔽されたディテイルを包み込んでいるのである。

これまで検討してきたように、出来事に劇的性格を与える要素は大きくわけて三つある。第一の要素は出来事そのものの内容である。さらにその内容を細く分類すると、①行為者または直接体験者が、著名人あるいは社会的地位の特別高い人間である、集団ないしは偶然の集合体である、国家を代表する政府や国民の一部を代表する党のような公的性格の組織である、さらにごく「平均的」と考えられる個人である場合等。②これらの行為者または直接体験者の境遇が短時間に大きく変化し、それまで不遇であればきわめてめぐまれた状態に、それまでめぐまれた状態であれば不幸に（離別、自殺その他による死といった）おちいる、また政府が崩壊したり、党が政権を得るか逆に失ったりする。③行為の性格や生じた事態がごくまれにしかみられないか「異常」である。④自然災害や人的災害で誰でもが被害者となり得たもの、等があげられる。「出来事が、人間における無秩序と自然における無秩序を結びつけるとき、その劇的な電荷は極めて大きなものとなる」⁸⁾としてG. バランディエはスリー・マイル島での原発事故を例にあげているが、最近のチェルノブイリ原発事故は地球規模の汚染をもたらし、各国の原子力政策の転換と反原発運動の活発化をうながすことになった。

二番目の要素は、こうした出来事が情報として伝えられる手段と経路の性格である。今日のマス・メディアは、大量の情報を多くの人々に早く正確に伝えることができるので、生起する出来事の報道に対する視聴者または読者の反応は早く、反響の大きさはただちにその出来事に関する取材の活発化、メディアの手段と経路の拡大につながり、短時間に、

時には過度にその報道が増幅される。他方、マス・メディアを媒介とせずに伝播・拡散する情報も多量にある。ある種の情報はむしろマス・メディアを避けて伝播する。「オルレアンのうわさ」⁹⁾はよく知られた例であり、人種的偏見や宗教的偏見が検閲を受けるマス・メディアの「表の」情報に対し、「隠された真実」として小声で口から耳へ伝えられていく「裏の」情報が存在することを明らかにしている。このような裏情報は、社会秩序が混乱し、マス・メディアが機能しなくなったとき、パニック状態におちいった群衆の攻撃性が、集団的暴力のかたちで弱者である小数派集団にむけて解き放たれる下地ともなるのである。14世紀の中世ヨーロッパでペストが流行した際に、井戸に毒を投げ込んだとされて、各地で起ったユダヤ人の虐殺、関東大震災で起った朝鮮人虐殺は、うわさが行動に直結し、悲劇的出来事を引き起こした典型的な例といえる。

出来事に劇的性格を与える三番目の要素は、出来事を情報として受けとる側の状態と反応である。これは、出来事の種類と起りかたによってことなるのはいうまでもない。突然、決定的事件が起る場合と前兆があり事態が拡大波及していく場合、あるいは繰り返し起る場合等それぞれ受けとる側の反応はことなる。さらに重要なことは、劇的とされる出来事にみられる時代の特徴である。この点について類型化は避け、歴史的によく知られた劇的出来事を例にとって、上記の三要素を具体的に探ってみよう。

2. 「劇的」出来事の諸類型

宗教改革が始まった16世紀初頭以降の西欧で、宗教対立の激しさを物語る実例に「聖バルテルミーの大虐殺」がある。ユグノー戦争の発端となった1562年3月のヴァシーでのユグノーに対する虐殺行為では60名の死者と250名の負傷者を出している。1567年9月29日の聖ミカエルの祝日には、150人のカトリックがニームでユグノーの手により井戸に投げ込まれ、その直後第二次ユグノー戦争が始まった。聖バルテルミーの虐殺でのユグノーの犠牲者数については、数千人から10万人まで様々な数字があげられているが、一説を紹介すれば、当時20万の人口を持つ¹⁰⁾パリで3000人程度、ボルドーやリヨン等の地方都市での総計は1万人以上¹¹⁾というものである。この大虐殺に至る過程を簡単に追うと、まずパリにおける緊張を高めた事件として、1572年8月22日のコリニー提督暗殺未遂があげられる。第三次ユグノー戦争を一応収束させた1570年8月のサン＝ジェルマン条約の後、カトリーヌ・ド・メディシスは、コリニー提督を宮廷に招き入れた。しかしシャルル九世に対する彼の影響力が強まるのを恐れ、カトリック強硬派のアンリ・ド・ギーズと手を組んで暗殺を計画し実行するが、失敗し負傷させたにとどまる。コリニーを手負いにしてしまった彼女は、この事件に対しユグノー側が反撃に出るのを恐れ、ユグノー派の幹部貴族全員をコリニーもろとも殺害する決定をギーズとともに下す。一方パリのカトリック狂信者達は、ユグノー教徒の所在を調べあげており、攻撃の機会を待っていた¹²⁾。そして宮廷で開始されたユグノー殺戮は、パリ全体のユグノー殺戮への号砲となった。8月23日にパリで始まった虐殺は翌

日には早くも周辺都市に波及、オルレアンでは25日から、最も遅かったのはボルドーで10月に入ってから始まっている。ところで、この一連の出来事では、いったい誰が誰を攻撃したのであろうか？信仰の違いのみではこうした敵意を説明できない。P.エルランジェは、貴族のあいだでは、外国にその起源をもつギーズ、メディシス、ヌヴェール、ピラージュ、ゴンディらが、フランスの古い封建領主の家系に属す、シャティヨン、ラ・ロシュフーコー、ラ・フォルス、テリニーらを攻撃したと指摘している¹³⁾。またパリ市内では主として金銀細工商や宝石商等の富裕な商人層が襲われ略奪されたとされている¹⁴⁾。そうであるとすれば、敵意は、アンリ・ド・ナヴァールとマルグリット・ド・ヴァロアの「不自然」な結婚への不満、ユグノーの勢力の急速な拡大、それも特に上層への浸透が引き起す不安として、日常生活の中で生み出され、吐け口を求めていたということになる。街中では、市民軍が組織的に虐殺を行っただけではなく孤児達の群や泥棒横丁の住人達まで加わった。また襲われたのは富裕な商人達以外にカルチェ・ラタンの外国人学生や本屋、仲の悪かった隣人や家族の一員等があげられている。

虐殺の情報は、主としてカトリックの党派に属す者達により伝えられた。ロワール川流域の都市にはモンソロ伯が「王命を伝える」と言ってまわり、時には、直接手を下した¹⁵⁾トゥールーズでは素性の知れない使者のもたらした「王の秘密指令」¹⁶⁾により虐殺が開始された。他方、国外へは難民として脱出した多数のユグノー達が、たどり着いたプロテスタント諸国に虐殺のニュースをもたらした。

ラ・ロシュルや南部地方のユグノー派の手中にあった都市や城砦では、知らせとともにカトリックの出入りを禁じ再武装をして抵抗を開始する。こうして第四次ユグノー戦争が始まるが、以前とことなるのは、もはやユグノー達が王権に対する幻想を捨てた点である。

聖バルテルミーの虐殺をかりうじて逃れ、ユグノー軍を攻める側にも、ひきいる側にも立った経験を持つアンリ4世の布告した「ナントの勅令」も、彼の死後何度も忘れられ無視された。フランス大革命までプロテスタントは完全な市民権を認められることはなかった。

宗教改革は「プラカード事件」（1534年）に続く迫害、「メランドルの虐殺」（1540年）等幾多の劇的出来事を経て、フランスに拡大していったが「聖バルテルミーの大虐殺」はこの拡大を停止させ、宮廷からプロテスタントを決定的に排除した。従ってこの出来事は、フランス革命まで国家と国民性の形成に重大な影響を与え、恐らくは、ユグノーの流出により、経済の発展にもある方向性を与えたといえる。カトリックの狂信徒達は大虐殺という劇的行為により、ユグノーを根絶することはできなかったが、その勢力拡大に歯止めをかけ、フランスがカトリックの国であり続けることに重要な役を果たした。しかし、この出来事が近代国家形成のうえで不可避なものであったことを認めるにしても、ユグノー勢力を含めた国民的統合が行なわれたうえでの近代化を想定するならば、この悲劇が多くの否定的要素を生んだ事実は疑う余地がない。

暗殺が未遂に終わったことでより重大な出来事に発展した例が、「聖バルテルミーの大虐殺」であったとすれば、暗殺の成功が、より重大な出来事に発展した例として、1914年6月28日の「サラエボ事件」がある。オーストリアがセルビアに、反オーストリア運動の禁圧と暗殺事件に直接あるいは間接に関与した者の厳罰処分を要求する最後通牒をつきつけたのが7月23日、同25日にはロシアで総動員令が下され、ドイツのロシアに対する宣戦布告が8月1日であった。ところで、「サラエボの銃声」から開戦まで事態は「劇的」に展開したが、戦争そのものはよく知られているように短期決戦による「劇的勝利」という各国の抱いていた願望が緒戦で崩れさり、長期にわたる膠着状態に入ってしまった。

ナポレオン一世の時代からそれまでに起った戦争では戦闘自体が比較的短期間に終わってきたために、「主力をもってする闘争（会戦）」¹⁷⁾によって戦争の勝敗を決定し政治交渉に移るというクラウゼヴィッツ的な本戦偏重主義が、第一次世界大戦開始時の各国の戦争指導部を支配していた。開戦時、ドイツの作戦計画は、それより数年前にシュリーフェンが作製したものを下敷きにしていた。シュリーフェンは、ロシアとフランスの両側の敵と闘う場合、まず西に対する決戦で勝利し次に東に対する決戦を行うこと、また数の上で優勢な敵に劇的勝利を収めるには、セダン包囲戦の場合のように幾可学的運動を行って敵の主力を包囲し殲滅するのを至上としていた¹⁸⁾。独仏国境の要塞地帯を、中立国ベルギーから迂回する作戦はシュリーフェンのものであるが、宰相のベートマン＝ホルヴェークの9月綱領にはベルギーのプロイセンへの合併が盛り込まれているのでこの作戦はこういう政治的目標とも合致していたことになる¹⁹⁾。一方、フランスの戦争指導部には、普仏戦争の反省のうえに立って練られたフォッシュ理論が強く影響していた。防御より徹底的な攻勢のみが決定的会戦に勝利する道だとして、主戦場への兵力集中を追求したフォッシュの戦争論は、マルヌの会戦で勝利することに寄与したとしても、劇的勝利を得ることには少しも寄与しなかった。

ナポレオン一世の時代の会戦では、本格的戦闘は1日で終る場合が多かった。第一次大戦では比較的短時間に終わったマルヌの会戦で6日間（退却していたフランス軍が反撃に転じた1914年9月5日からドイツ軍の全右翼に退却が命じられる9月11日まで）、ヴェルダンの攻防戦ではドイツ軍の攻勢が1916年2月21日に開始され、4ヵ月間続き、7月1日に開始されたソンムでのフランス・イギリス軍の攻勢も4ヵ月間続けられている。さらにヴェルダンでの反攻は10月から翌年にまで続けられ、ソンムの会戦における双方の戦死が50万を越え、ヴェルダンの会戦では全期間をとおして70万の戦死者を出したといわれている。しかもこれらの会戦はそのどれをとっても、莫大な人命の損失にもかかわらず、戦局に「劇的」効果を与えていない。

敵国軍の主力を短期決戦で殲滅し、その劇的効果で外交上の政治目的を達成する期待がくずれ去り、国民の総力をあげての消耗戦へと変化したのは、彼我の戦力、国力が拮抗していたことも一因であるが、長大な戦線を保持するのに必要な兵力の動員が可能になって

おり、しかもこの戦線が、深く複雑な塹壕陣地により双方とも容易に突破できなかったことも原因である。

第一次世界大戦において、正規軍主力同士の衝突での「劇的」勝利が、国際政治の特権的手段であった時代は終わった。戦争は交戦国のどちらの側かが、その経済に破綻をきたし、国民が戦意を失って政府が倒れるまで続く時代となった。さらに、正規軍が破れ政府が倒れて敵に国土を占領されても、様々なかたちで抵抗を組織する技術と思想が発達していき、現在では、核兵器も含めて、強力な軍事力を維持すること自体が疑問視されるべき時がきている。

ごく最近、世界に大きな衝撃を与えた出来事のひとつに、1989年6月4日の「天安門事件」がある。この出来事は、「劇的」であるための様々な条件を備えもっているがゆえに検討に値する。まず歴史的コンテキストとして、ソ連及び東欧諸国の政治体制が大きく変わりつつあること、またアジアでは1986年2月のマルコス政権崩壊以降、韓国での民主化運動の高まり、ビルマ（ミャンマー）での民主化運動の高まりとその弾圧（1988年10月）等が続けて起りつつあることがあげられる。すなわち世界は社会主義国に限らず、一党独裁もしくは専制政治の行われている国々での民主化運動の流れに注目していた。そのような状況のもとで、民主化を要求する中国学生の集会が始まった天安門広場は、1966年に「文化大革命」を世界に印象づけた紅衛兵の百万人集会、1976年4月に鄧小平が扇動者として失脚させられることになった周恩来の追悼集会といった大変重要な政治的出来事の舞台であった。この天安門広場に大勢の人間が結集するときは、必ず何らかの政治的变化が起ると思われていた。失脚して急死した胡耀邦・前党総書記の追悼集会自体すでに「劇的」である。アイスキュロスの復讐劇「供養する女たち」は、クリュタイメストラとアイギストスに殺された父・英雄のアガメムノンの墓をオレステスとエレクトラが訪れ再会し、父殺害の出来事を忘却から救い出し復讐を誓うところから始まり、「ハムレット」は父の亡霊から直接殺害された事情を聞き復讐を決意するところから始まるように、思いを残して死んだ者の供養や追悼は、死者の意志をうけつぎ、死に追いやった者達への復讐を誓うきわめて「劇的」行為であるといえる。さらに、学生達は、故胡耀邦のめざした政治改革を支持ただけでなく、「民主」のスローガンを立て「自由世界」にあからさまな親近感を示して、議会制民主主義の発達した国々とのコミュニケーションを求めた。「学生たちもパソコン通信、ファクシミリ、電話で、世界各地と情報を交換し、対話を続けた¹⁰⁾」のである。集会の様子が衛星を経由して全世界のテレビに写され、世界各地の反応と何よりも彼ら自身の運動の全体的外観についての情報が短波放送などで外から中国に送り返された。いわば舞台の上の役者は観客（世界）を呼びこみ劇場と化すことに成功したといえる。学生達が政府首脳との直接交渉を実現し戒厳軍兵士達とのコミュニケーションを拡大しつつあるのをみれば、この民主化運動が実質的政治改革に直接結びつくことを観客の誰しもが予想したであろう。しかし政府内では保守派が改革派との権力闘争に勝利して武力行使を命令

することで事態は、「逆転」（つまり対話の可能性が暴力の使用による強引な旧秩序回復で完全に否定されるという急激な情勢の転回）、「認知」（つまり中国の経済・社会の近代化を荷担うべき中国共産党指導部の前近代的体質と学生等民主化運動主体の弱点が明らかになること）、そして運動に参加したために殺されたり、亡命、潜行あるいは主義主張を捨てて旧秩序に服した者の「苦難」の三つの要素、すなわち古典悲劇のストーリーで不可欠とされた要素をすべてそなえ、展開したのである。

国際社会は、ソ連のペレストロイカにより、東西両陣営への政治的・軍事的・経済的さらには文化的二極化の時代が終り、地域国際社会における多様化と多中心化が確実に進行しているように思える。しかも多様化と多中心化を維持したまま、相互の交流を拡大していくことは今日の経済・社会・環境変化の早さに対応するために不可欠な国際政治のあり方である。衛星中継による情報交換により、刻々生じる出来事は世界中に同時に報道されるもはや国境で情報の流れをせき止めることが困難になっている。従って国内的にも、文化・経済・政治の領域で多様性と多中心性を育てつつ、その上に政府の強力な指導性を発揮する以外に、現在の状況に対応する道はない。「天安門事件」では主人公である学生達が、現在の世界の潮流に政府が整合的であることを要求し、情報社会の新しい世代として国際的マス・メディアを意識しつつ行動をとり、一方の中国政府は、秩序を維持する側に立つ者がとりうる手段として最も「劇的」な、武装していない群集を一挙に実弾で排除するという方法を選んだ。この選択は、内政における「劇的」効果の計算にもとづくものであったにせよ、中国政府に対する国外からの反発は恐らく予想を上まわるものであったに違いない。中国にとって、その指導層が現在の国際社会の潮流を把握できず、改革の芽を武力で摘みとってしまったことこそ「悲劇」であった。

おわりに

ある種の出来事に多くの人々が注目し、強い反応を示すのは事実であるから、そのような効果を期待してひとつないしは一連の出来事を引起すのは、人気を呼ぶことを期待して劇を演ずるのと同様に可能である。しかし、劇場の外では、最初から最後まで演出された出来事に対して、「芝居がかっている」とか「茶番だ」という評価を下すであろうし、一定の型にはまっているものに対してはセレモニーとしてしか受けとらないであろう。いつの時代でも、出来事に「劇的」性格を与えるのは、直接的行為者や体験者にとって日常生活で行なうありふれた演技の繰り返しが不可能になる事態や知らされた側の想像を越える事態の発生である。逆説的ではあるが、出来事に作為や演出が見られなければ見られないほど劇的效果は大きい。そうであるがゆえにまた、「劇的」と形容される出来事は、その時代の特徴を体現しており、記述される歴史の重要な構成要素を成すのである。

劇的出来事の発生は、その本来の性格上予測されるものではない。発生してみてもはじめて、この出来事にまきこまれた人々と社会の「運命」がみえてくる場合がある。劇的出来

事に社会的役割があるとすれば、日常生活の秩序の中で直視するのを避けている生の不安と、時代の抱えている深刻な危機に無理やり人々の目を向けさせる力を持つことである。しかしそのような重大な出来事は起きないに越したことはない。ちょうど地震の予知に地殻の貯えているひずみエネルギーが基礎的データとなるように、社会のひずみもあらかじめ測定され解消されるような手段を様々なかたちで発見することが望ましい。その意味で過去に起きた「劇的」出来事の研究が役立つわけである。

注

- 1) 河竹登志夫「演劇概論」東京大学出版会、1978。
- 2) アリストテレス「詩学」（「世界の名著8 アリストテレス」中央公論社に収録されているもの）1450b, (P296)。
- 3) *ibid.* 1452 a, 1452 b (P.303, 304)。
- 4) シュッツ, A. 「現象学的社会学」森川真規雄・浜日出夫訳, 紀伊國屋書店, 1980, P.219。
- 5) ゲーテ「ファウスト1」相良守峯訳, 岩波文庫, P64, 65。
- 6) バランディエ, G. 「舞台の上の権力」渡辺公三訳, 平凡社, 1982, P.151。
- 7) *ibid.* P.14。
- 8) *ibid.* P.168 ,169。
- 9) モラン, E. 「オルレアンのうわさ」杉山光信訳, みすず書房, 1973。
- 10) Garrisson, J. “la Saint-Barthélemy” Bruxelles, 1987, P.131。
- 11) Gwynn, R. D. “Huguenot Heritage—The history and contribution of the Huguenots in Britain”, London・New York, 1988, P.16。
- 12) エルランジェ, P. 「聖バルテルミーの大虐殺」磯見辰典編訳, 白水社, 1985年, P.16。
- 13) *ibid.* P.240。
- 14) *ibid.* P.169~172。
- 15) Miquel, P. “Les Guerres de Religions”, Paris, 1980, P.286。
- 16) *ibid.* P.288。
- 17) クラウゼヴィッツ「戦争論」(中) 篠田英雄訳, 岩波文庫, P.52。
- 18) Aron, R. “Penser la guerre, Clausewitz II—L’âge planétaire”, Paris, 1976, P.40。
- 19) フィッシャー, F. 「世界強国への道I」村瀬興雄監訳, 岩波書店, 1983, P.127。
- 20) 船橋洋一記者「視点・激動中国」朝日新聞1989年6月11日版朝刊。

Efficacité Dramatique des Événements

Hiroshi TAKANO

Faculté des Etudes Générales

Université pour les Sciences Naturelles d'Okayama

1-1 Ridaicho, Okayama 700 Japan

(Received September 30, 1989)

Aujourd'hui, la mise en place des stellites de télécommunications nous permet d'assister, voire même de participer les événements du monde entier qui sont en cours. Parmi ces événements, les uns sont qualifiés comme "dramatiques" et les autres ne le sont pas. Nous examinons d'abord la définition classique du drame dans le domaine du théâtre. Puis, nous cherchons les éléments et les conditions avec lesquels un événement peut être "dramatique", en citant les cas historiques : le massacre de Saint-Barthélemy, le déclenchement de la Première Guerre Mondiale et le récent événement de la Place Tien An Men en Chine.